文化と芸術
文化・芸術研究センター
ニュースレター
Vol.9
March 2009

CONTENTS

巻頭寄稿 1
公開講座紹介 2~3
特別研究紹介 4~5
調査研究報告 6
静岡国際オペラコンクール 7
特別公開講座 7
室内楽演奏会 8

静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1　〒430-8533
●Tel：053-457-6113 ●Fax：053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

Art & Culture

デザイン学部長
河原林桂一郎
Keiichiro　Kawarabayashi

文化芸術デザインのすすめ

今日デザインを取り巻く情勢は大きく変わってきました。スケッチを描いて自分の作品だと言っていた時代から生活やビジネスをどうデザインするかという構想のデザインが必要とされてきました。コンセプトが大切でありデザインや感性的価値あるいは情報的価値が益々重要になっています。日本は、コンセプトを中心とした感性的価値としてのデザインやブランド力を高め、産業の付加価値を高めることが必要であると言われています。日本の素材や様々な生産技術、加工技術をもう一度見直して生かすことが望まれています。

機能を表現する、美しい視覚的表現をするだけでなく、コミュニケーションをデザインするということが重要となってきました。特に最近は、情報コミュニケーションが価値を持ってきています。表現から始まり、計画、そして意味としてのデザインが問われています。それは社会的、文化的なコンテクストの中で、どう価値を生み出すかということです。極端に言いますとローテクでも社会的、文化的な価値を誘発させるようなエモーションがあるデザインというのが世界的にヒットしており、感性的価値が非常にクローズアップされていると考えます。

「デザイン」という概念は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、産業革命が生活に影響を与えだした時期に成立しています。産業革命によって大量生産された製品の流通と販売が必要となり、商工業の発達と共にデザインは、「望ましい生活様式の確立に向けてなされる造形的な活動」とされました。中流階級が発生し、大量生産、大量消費がデザインを発展させました。

DESIGNの語源は「DE(打ち破る、乗り越えるの意味)+SIGN(誰もが等しく認めているもの)」即ち、誰でも認めているものごとのあり方を打ち破るような設計という創造への挑戦でした。今日ではデザインには計画とか設計だけでなく、組織や制度をデザインする、工程とかフローとかプロセスそのものをデザインするという具合に、ビジネス、産業界での新しい価値創造やソリューションと言われる部分までが含まれてきています。

芸術も技術も語源のルーツは同じで、ギリシャ語のテクネ(techne)やラテン語のアルス(ars)に見られるように人工物や技術を指しており、英語のartでも芸術、美術、技術、技芸と訳されています。古代から中世におけるアートは、①実用を目的とした技芸(Mechanical　Arts:美術、農業、医術、航海術)②知的な認識の技術(Liberal　Arts:音楽、文学、算術、天文学、幾何学)に分類されています。後にレオナルド・ダ・ヴィンチは、美術を科学(幾何学、解剖学など)に近づけ美術の地位向上を果たしたといわれています。1919年にドイツのワイマールに設立されたバウハウスは、芸術と技術、芸術と工業生産を結びつける教育機関として、その後のデザイン教育に大きな影響を与えています。それまでの美術工芸教育とは大きく一線を画したバウハウスの教育は、建築、インダストリアルデザイン、ヴィジュアルデザインなどの広い領域で、単なる教育機関の役割を超えた新しい生活環境や生活文化の原初的形成に大きな影響を与えました。

今日、私たちがコンピューターの電源を入れる時はハードボタン(製品)で入力し、ソフトボタン(画面上)で消すというようにハードとソフトが入り混じってくるという状態が起こっています。使う側にとってどういう使い方が一番いいのかというようなユーザーエクスペリエンスが一番試されています。感性やインタフェース等において、デザインの負荷が増えてきています。製品のデザインからインタフェース、メディア、空間、環境、あるいはブランドへと様々な分野でデザインの領域が拡大してきています。デザインにとって大事なことは、これらの要素をトータルに生活者や生活文化の視点で横串を通すことだろうと思います。デザイン活動による価値づくりから考えると、マネジメント能力、コンサル能力、プロデュース能力を表現及び計画に一致出来ることが大切です。

これからは、モノづくりの街、浜松における文化芸術としてのデザインを考えてみる必要があります。日本の中心に位置する浜松はモノづくりのまちとして起業精神、先取り精神で多くの製造業の創業者を輩出してきました。最近では、デジタルフォント製作やCAD、CAMを駆使した金型設計などのIT関連産業の進展も著しいものがあります。また、浜松市は日本でも有数の外国人比率の高い国際都市として多文化が共生する街を目指しています。浜松には世界的な企業が多く、それらを支える中小企業が非常に高度な技術を有しており、熟練労働者のクラフトマンシップが産業に生かされています。革新的な新技術の消化も早く、長持ちさせる、修理して使うという気風も存在しています。また、早くからグローバル志向が、ものづくりを支えていると言えます。

本学にはデザインを通じて生活者の目線で考え、文化面でも地域から多くを発信することが望まれていることは間違いありません。文化の多様性をいち早く受け容れている浜松の風土を背景に、日常生活にデザインが根付き、デザインを生活の豊かさに位置づけた文化力の発信が重要だと考えます。デザインを地域の文化や歴史の文脈の中で世界に向けて発信することが、本学のこれからの文化芸術デザインにつながると期待しています。

公開講座紹介 1

「愛されるロボットになりたい」

宮田圭介（デザイン学部メディア造形学科）

本講座では、家庭用ロボットの将来を考えるために、私たちの考えるロボット像、家庭用ロボットの課題、その将来像について議論を行いましたので、その概要をご紹介します。

○私たちの考えるロボット像

「ロボット」と聞いて連想されるものには、鉄腕アトム、鉄人28号、ドラえもん、ガンダム、AIBOなど多々挙げられます。米国ですと、Lost in Space（宇宙家族ロビンソン）のフライデーやSTAR WARSのR2D2とC-3PO、ROBOCOPなどが思い出されます。米国と比較すると日本のロボットは人間に親しい印象を受けますが、その理由の一つとして、手塚治虫氏の影響が挙げられます。手塚氏の代表作である鉄腕アトムを知っている日本人にとって、「ロボットは人間の友達」ですが、欧米人には「ロボットは人間の僕（しもべ）」が一般的なイメージです。この文化的な違いが、各国のロボットのデザインや製品に反映されています。

○家庭用ロボットの課題

ロボットが家族の一員になるために解決すべき課題として、「人間並みの視覚」と「人間らしさの実現」について考えました。「視覚」課題の一例ですが、どうして人間は二次元の線図形から三次元物体を認識することができるのでしょう。図1の図形は「ふたの無い箱」に見えますが、「ふたに線が描かれた箱」や「ふたの一部が切り取られた箱」にも見えます。（この図形から5種類の物体が考えられます!）人間には当たり前の認識能力ですが、ロボットは立体に認識できません。また、「人間らしさ」の課題として、東京工業大学名誉教授の森政弘博士が発見された「不気味の谷」を取り上げました。その概念を図2に示します。人間に似ていないキャラクターやぬいぐるみには親しみを感じますが、人間に似た能面やマネキンになると不気味さを感じて、死体は不気味の極致（谷底）に達します。最新の人間を模倣したアンドロイドでも「動く死体」に感じられて、この谷を越えることができません。「人間らしさ」の本質が解明できなければ、この課題は克服できないようです。

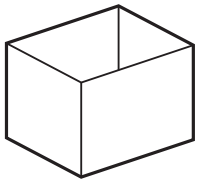

図1

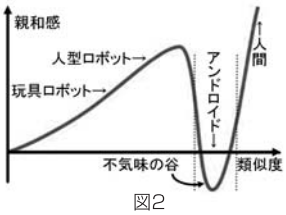

図2

○家庭用ロボットの将来像

これら残された課題を踏まえながら、家庭用ロボットのいる近未来の暮らしを想像しました。家庭用ロボットの市場動向は、介護用･介助用などのサービス用ロボットと、ペットロボットの二つの方向に向かっています。ここでは、将来の介護用ロボットの事例として電動車椅子iBOT4000を取り上げました。ユニバーサルデザインの意識向上により都市部においてエレベータは普及しましたが、郊外では未設置の場所が多く、家庭用エレベータも珍しいのが実状です。脚の不自由な方はどこでも行けるわけではないのです。ところが、この電動車椅子は階段や段差を自由自在に昇降できるため、移動の制約がかなり解消されます。残念ながら、この車椅子は高価格のために普及していません。しかし、階段が昇れる介護用ロボットの普及と、エレベータなどの環境整備のどちらに予算（税金）を投入する方が効果的であるのか、検討する余地は大きいと言えます。ペットロボットの事例としては、産業技術総合研究所で開発されたアザラシ型ロボット「パロ」（写真1）を取り上げました。ペットロボットはプログラムされた学習能力しかない点では、生き物のペットに劣ります。その反面、「ことばでコミュニケーションがとれる」「主人の不測の事態を監視できる」「病院の中で動き回ることができる」長所があります。パロはアザラシの動きと鳴き声を模倣して作られており、「世界一の癒しロボット」としてギネス世界記録にも認定されているペットです。生き物の入れない病院や老人介護施設において、パロはアザラシに代わるペットとして、患者をいやすために活躍しています。

写真1

○愛されるロボット

ロボットが愛されるためのポイントを考えました。「マイカー」「マイホーム」「私だけの○○」など人々に愛されてきた工業製品に着目すると、「思い入れが感じられること」「ユーザー毎に対応できること」「カスタマイズできること」などがポイントになると思います。ちなみに、パロのまつ毛は手縫いで、専門トリマーによる顔周りのトリミングが施された、一体毎に異なるハンドメイドです。愛されるポイントを全て備えています。以上の考察から、日本人の優れたサービス精神が生かせる点で、愛される家庭用ロボットは今後も日本を中心に開発、提供されるだろうという結論に至りました。

公開講座紹介 2

南米から人と文化を迎える
～日系人社会と浜松～

イシカワ エウニセ アケミ（文化政策学部国際文化学科）

2008年はブラジルへの日本移民100周年であったが、ペルー、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビアなど南米の多くの国々にも日本人が移住している。それぞれの国で日本移民は日本の文化を日系二世･三世に伝え、現地での日系人社会が築かれている。ここでいう日系人とは、海外生まれの日本移民の子孫であり、そのほとんどが日本国籍を持たない者である。日系二世とは、日本移民の子ども、日系三世は孫である。しかし近年ではこのような日本文化を持っている多くの日系人が来日し、浜松市にも多くの人々が居住するようになっている。ちなみに浜松市在住の外国人人口は33,619人（2008年9月現在）であるが、そのうちブラジル国籍者が19,272人、ペルー国籍者が2,424人である。

最初の南米への日本移民は、1899年のペルーへの移民である。移民の理由は、明治維新後、日本国内における土地所有制度の改革で、多くの農民が土地を手放すことになったことによる。この改革で多くの小作人に土地の所有が認められたが、同時に高率な税金が払えなくなり、やがて土地を手放し、多くの人は失業者となった。また国内の人口増加により、食糧不足の問題も深刻化していった。このような状況の中、移民を促す日本政府の後押しもあり、多くの人が海外への移住を選択した。当初、ほとんどの移民は短期間の出稼ぎ目的で日本を後にしたが、その大多数は様々な理由により移住先に永住し、現地で日本人社会を築き上げたのである。現在、海外に住む日系人人口はブラジルをはじめ、南米への日本移民が最も多い。その移住先と人数は以下の通りである（表1）

表1.南米へ移民した日本人

	日本からの移住者数（合計）	日系人人口（現在、移民の子孫を含）	最初の渡航年	備考
ブラジル	260,357	1,500,000	1908	
ペルー	35,685	80,000	1899	
メキシコ	15,338	17,000	1897	
アルゼンチン	6,604	32,000	1908～09	ブラジル経由
パラグアイ	10,321	8,000	1936	
ボリビア	6,579	30,000～60,000	1899	
ドミニカ共和国	1,390	800	1956	
キューバ	616	800	1898	
チリ	552	1,600	1875	2人
パナマ	456			
その他	1,473			
合計	339,371			245,966（戦前）

出典:複数の資料を基に筆者により作成。

一方、1980年代後半から南米出身の日系人が数多く来日することになり、現在約40万人に達している。そのうち最も多いのは31万人以上のブラジル出身者である。南米からの日系人の来日が急増した原因として、1990年6月に日本の入国管理法が一部改正され、日本国籍を有しない日系二世に「日本人の配偶者等」、そして日系三世に「定住者」の在留資格が与えられ、日系人の入国が優遇されたことがあげられる。日本は基本的に専門的な知識を持つ外国人以外は日本の労働市場に受け入れない政策をとっているが、日系人に与えられた在留資格は日本における活動に制限のないものであり、合法的に単純労働にも就くことが可能になったのである。また南米側では、80年代以降、経済危機の問題が深刻化しており、日系人は単純労働であっても、短期間で高収入が得られるという魅力を感じ、多くの人が来日したのである。来日する日系人の中で、本国で単純労働に携わっていた人は稀であり、そのほとんどは学生やサラリーマン、そして専業主婦であった。

現在、日本において大多数の日系人は、単純労働者として自動車･機械産業関係の仕事に就いており、またほとんどが派遣業者及び請負業者を通して工場などで仕事をしている。そのため日本での生活は、仕事内容、低い賃金、住宅問題、子どもの教育などといった様々な障害と困難に直面している。また最近の日本国内の経済危機により、多くの日系人が解雇され、浜松市でも多くのブラジル人、ペルー人が仕事を失い、帰国するか、または日本で再就職するかという迷いのなか、不安定な生活を送っているのが現状である。

在日ブラジル人の子どもに焦点を当てると、2007年現在、日本におけるブラジル国籍者の内、0～14歳が16%を占めている。つまり日本で生まれ育っている、あるいは幼いときに来日している子どもが多いという現状が確認できる。そのなかで近年、ブラジル人が集中する地域（愛知県、静岡県、群馬県など）ではブラジル人学校が設立され（日本全国で110校）、ブラジルと全く同じ教育が提供されるようにもなった。とはいえ地域的に限られているため日本の学校に通う日系人の子どもの方が多いといえる。例えば浜松市教育委員会の調査によると、平成20年現在、市内在住の義務教育相当年齢（6～14歳）の外国人児童･生徒は3,096人（大多数はブラジル国籍者）であり、そのうち55%が市内の小･中学校に在籍しており、22%が外国人学校に在籍していた。残りの23%は帰国または日本国内で引越しをしたのか不明である。

ここで注目すべき問題点は、この子どもたちが将来どこで暮らすことになるかである。歴史的に見ても、アメリカ合衆国や中南米への日本移民のほとんどが短期滞在（5年から10年間）の目的で移住したが、その地で生活基盤を築き、現在の日系人社会及びその国の一国民として生活している。同じように、日系人の子どもが日本で永住する場合、日本での生活基盤を築く必要があり、日系人家庭のみの問題でなく、日本の地域レベルでも考える必要があるだろう。

特別研究紹介 1

（平成20年度センター長特別研究）

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その3）

古瀬　敏（デザイン学部空間造形学科）

今年度は静岡県がユニバーサルデザイン室を設置してから10年目ということから、この間にどれだけユニバーサルデザインが普及したかを見直すことを意図して、「しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウム」が静岡県と静岡文化芸術大学との共催で、11月13日と14日に行われた。本特別研究ではその実施を研究活動の一環として位置づけることになった。

シンポジウムでは、県が行政として行ってきたことを振り返るというよりは、民間がどのくらいまでユニバーサルデザインの理念を踏まえて動きつつあるかを見つめようということで、シンポジウムの企画としては地元企業の取り組みを紹介しながらさらに推進するきっかけづくりを目指した。もちろん、県が行ってきたこと、そして静岡文化芸術大学が地域に関与していることについてはパネル展示などで情報を提供した。

初日は基調講演として大宅映子氏に「誰のためのデザインか」と題して辛口のお話を依頼、また米国から記念講演者としてユニバーサルデザインの父と言っていい故ロナルド･メイス教授とともに研究所でずっと仕事をしてきたレスリー･ヤング氏を招聘して、「ユニバーサルデザインの到達点と今後」についての講演を実施した。

初日午後の講演後、河原林デザイン学部長と対談するレスリー･ヤング氏

これらの講演と組み合わせて、地元そして日本での成果を事例として紹介する発表をパネルトークも含めて設定して議論を行った。また2日目にはワークショップを設定し、地元企業であるヤマハ株式会社とヤマハリビングテック株式会社での製品開発をテーマに議論を行った。さらに希望者には、午後の時間を用いてユニバーサルデザイン関連施設の見学が設定された。これまで本学で実施したユニバーサルデザインのシンポジウムでは、ワークショップは人手の関係などもあって行えなかったので、参加者はどちらかといえば受け身という感じだったが、今回は積極的な参加の場を提供できたと考えている。

本学人体機能実験室の設備について説明する迫秀樹准教授

本研究の一連の流れの中で、これまで何度か米国と英国から専門家を招き、ユニバーサルデザインの理念と実践を県民に紹介してきたが、今回はとくに多様な内容が含まれており、全体を通して見ると、フォントデザインから住宅関連製品、自動車、住宅、そして公共交通機関まで、さまざまな局面でユニバーサルデザインがどのように考えられ、どのように実現されているかを参加者に伝えることができたと考えている。

また、今回招いたレスリー･ヤング氏は、現在はノースカロライナ州立大学付属のユニバーサルデザインセンターを離れてしまっているが、同センター在籍中にメイス教授といっしょにユニバーサルデザインの事例を分析した報告書からいくつか選んで重要なポイントを説明してくれた。これまでの公刊されたさまざまな書籍や報告書などで、実例分析を行いながら全体を通してユニバーサルデザインのあるべき姿の議論をしているものはじつはあまりなく、またこうした報告書の内容を説明するのはなかなか作成当事者以外はやりにくいということもあって今まで紹介されることもなかったので、いい機会だったといえよう。

なお、ユニバーサルデザインセンターの成果物として、下記の2つが参考になる。いずれもWebアドレスhttp://www.design.ncsu.edu/cud/pubs_p/pud.htm からダウンロードできる。

1）Case Studies on Universal Design, 1998

2）The Universal Design File: Designing for People of All Ages and Abilities, 1998

特別研究紹介 2

（平成20年度センター長特別研究）

メディアアートフェスティバル（MAF2008）

長嶋洋一（デザイン学部メディア造形学科）

1.はじめに

本学の特長である芸術文化マネジメント、デザイン学部のアートとサイエンス（技術と感性）の結び付いたメディアアート戦略を、将来に向けたSUACの重要な柱の一つとして研究している。本稿ではその中で、2008年12月に開催したメディアアートフェスティバル(MAF2008)を中心に紹介する。

2.MAF2008の概要

2001年から毎年開催しており、SUAC発信のイベントとして国内でも知名度が向上しているメディアアートフェスティバル(MAF2008)は、12月19日から12月21日の3日間という短期集中型として開催した。

新たな目玉として、(1)メディアアートや日本の文化振興を考えるシンポジウム、(2)「フィジカル･コンピューティング」ワークショップ(+メディア･パフォーマンス)を企画し(後述)、さらに従来と同様に、(3)インスタレーション展示、(4)ムービー･シアター、(5)Flash/Web ギャラリー、(6)SUAC CGギャラリー 、を開催した。

3.シンポジウム

MAF2008最終日のシンポジウムでは「日本のメディアアートの未来を考える～芸術ー産業、非営利ー営利、振興政策をめぐって～」という表題のもと、我が国最前線のゲストを迎えて、メディアアート分野にとどまらず、今後の日本の文化振興を考えるうえで示唆に富む最先端の議論が展開された。

まず、本学の川勝平太学長の歓迎の辞「メディアアートと文化立国･日本」に引き続き、文化政策学部の片山泰輔准教授から、本シンポジウムの趣旨説明･問題提起が行われた。これまでの日本では、非営利の芸術活動の振興を文化庁が担い、営利の文化産業振興を経済産業省が担うという役割分担がなされてきたが、メディアアート領域ではこうした役割分担では説明がつかない状況がみられ、新たな政策的枠組み構築の必要性が提起された。

清水明文化庁芸術文化課長の講演では、メディア芸術祭を中心に、文化庁が近年力を注いでいるメディア芸術振興政策の概要が示され、それらが従来の文化庁の政策対象を超える新たな領域である点や、新たな日本文化の発信として国際的な展開をみせている現状が報告された。

早稲田大学大学院国際情報通信研究科の境真良客員准教授は、経済産業省メディアコンテンツ課長補佐や東京国際映画祭･組織実行委員会事務局長を務めた経歴を持つが、講演の冒頭では、メディア芸術、コンテンツ、マルチメディアといったキーワードが、霞ヶ関における省庁間競争の産物であり、差異を強調するそれぞれの主張に踊らされることなく本質をみきわめることの重要性が指摘された。また、経済産業省では商品市場の枠組みで政策を展開してきたが、今日のインターネットの発展は、商品の売買という形態を成り立たなくする状況をもたらしており、創造力を最大化するシステムを再構築していく必要性が主張された。

後半のパネルディスカッションは、2人の講演者に、三菱UFJリサーチ&コンサルティング芸術･文化政策センター長の太下義之氏を加えて行われた。太下氏からは2つの講演をふまえ、Webやデジタル産業が従来の市場のメカニズムを壊し、大量のコピーの流布や、増加する二次創作への対応として、著作権システムをはじめ、メディアアート=デジタル対応を前提としたアート文化の形に関する新たな制度構築の必要性が指摘された。また、もはや単純な二元論（娯楽と芸術･営利と非営利）ではないという点から、政策として「文化の多様性」をどう成立させていくのか、また、大量の映像と接する現代人にとっての映像リテラシーの重要性や、市場や税金によらない新たな資金の流れを考える必要性等に関する問題提起がなされた。

4.ワークショップ

12月21日(土)には、メディアアートの領域で注目されている「物理コンピューティング」「スケッチング」をテーマとした、3部構成の1日ワークショップを開催した。

前半は、GAINERやFunnelの開発者として活躍中の小林茂氏(IAMAS)とSUACの長嶋による、GAINERを中心としたハンズオン･レクチャーとして、情報系工房であるマルチメディア室の設備を活用した実戦的な講習を行った。これまでコンピュータ内に閉じた世界でMax/MSPやFlashなどのメディアデザインを行っていて、リアルな物理世界とやりとりする事に興味を持つ参加者が関東圏や地元の楽器業界からも事前登録により参加し、SUACの院生･学生も参加した。

後半は「物理コンピューティング」をパフォーマンスに活用した事例紹介として、音楽家のRAKASU PROJECT.氏のライブパフォーマンス、SUACの長嶋も加わってのライブを行った。

5.MAF2009、さらにメディア造形の未来へ

SUACの10年目である2009年のMAF2009については、「しずおか国民文化祭」の一環として、文化庁メディア芸術祭の地方開催版をMAF2009の一部として、2009年10月30日から11月3日まで開催する。SUACからはその一環である「学生CGコンテスト」において2007年に1作品、2008年に2作品が寡作入賞したので、これらの凱旋展示を含めた盛大な作品展示を予定している。行政が「コンテンツ産業が21世紀の日本を支える」という視点からいろいろな振興策を展開していることに対応して、SUACから発信するメディアアート戦略が、地元の産･官といかに連携していくか、という視点で、今後もプロジェクトをさらに進めていきたい。

調査研究報告

浜松都心歩行者調査

根本敏行（文化政策学部文化政策学科）

1.調査の背景

近年浜松市では、中心市街地（以下「都心」も同じ意味で使う）の空洞化が都市の課題の一つとなっている。

浜松市は平坦な遠州平野に立地し、モータリゼーションの進展のもと、工場や市街地を始め、商業等の集客施設や公共施設までもが郊外に分散立地してきた。そして、1990年の法律改正による大規模小売店立地の規制緩和以降、大規模なショッピングセンター（以下SCとする）の郊外立地に拍車がかかった。

当然の帰結として、中心市街地に集積していた商業･飲食･娯楽機能を中心に新しい郊外の店舗への大移動が生じ、人の流れも広大な無料駐車場を有する郊外店舗に移った。

都心の空洞化を示す指標としては、人口、世帯数、就業者数、商店の売上げや床面積の推移などがあるが、より直接的に都心の賑わいを現す指標として歩行者の交通量がある。人口や就業者数、商業の統計等は国の指定統計として全国で継続的にデータが集められているが、歩行者の交通量については法的に調査を義務付けているものではなく、また実施主体も行政だけではなく商工会議所や商店街等の民間セクターが行うことも多い。

浜松市では、2002年度から市によって都心の歩行者（自転車を含む）交通量の調査が行われてきており、2008年度現在も継続している。2006年度には調査方法等の見直しが行われ、これを機会に既に中心市街地活性化の調査研究でお手伝いをしていた根本研究室が歩行者調査も一部お手伝いすることとなった。

2.調査の概要

浜松市の歩行者交通量調査は、市内の主要な道路上の調査地点で、調査員が終日通過する歩行者（男女別）･自転車の数をカウントするものである。

2006年度以降は、調査のターゲットを都心の空洞化とそれに対する都心活性化対策の効果測定に置き、それ以前の調査地点数89ポイントから旧都心地域を中心とする41ポイントに絞り込んだ。具体的には、JR浜松駅周辺から西はザザシティ、北はビオラ田町付近まで、東は楽器博物館からアクト通り界隈までの範囲となる。

カウントする対象は中学生以上の男女、自転車（乗車のみ、降車して押している場合は歩行者とする）、カウント時間は午前10時から午後8時、調査時期は毎年10月の中旬、金曜日に平日調査、日曜日に休日調査を実施している。

なお2006年度の見直し以降は、歩行者交通量観測地点の中の10ポイントで、歩行者へのインタビュー調査を行っており、主な立ち寄り先や利用交通手段などを聴取している。

3.調査結果から読み取れること

2002（平成14）年度から継続する41調査地点の歩行者数合計（単純合計）の推移を見ると、平日、休日ともに2007（平成19）年度までほぼ一貫して減少傾向が続いていることがわかる。（図1）これは、地元商店主や市民の持つ「都心を歩く人の数が減ったように思う」という素朴な印象を裏付けるものである。ただし、2007年度の平日のデータは、途中から降雨の影響を受けたため参考値としている。

次に平日、休日別の動向を見ると、休日は2002年度の約40万人から2007年度の約25万人に、平日は約28万人から16万人に減少している。平日の推移は、降雨のあった2007年度には減少しているが、その直近の2005年度から2006年度には少し増加している。分析中の2008年度データ（速報値）ではおよそ20万人となっているので、平日の歩行者量はここ数年でほぼ底を打っているのではないかと考えられる。一方、休日の2008年度データ（速報値）はおよそ20.7万人で、なお減少傾向が続いている。

2002年ごろは、休日と平日でおよそ1.5倍の差があったが、この差は徐々に縮小し、2008年度ではほぼ並ぶ。かつての都心はあらゆる都市的機能の集積する場所であり、とりわけ休日にお洒落して出かける「ハレ」の場でもあった。近年、平日と休日の差がなくなりつつあるということは、都心が「ハレ」の場でなくなりつつあるということであろう。

一方、都心の東部では区画整理が竣工し、新しいビルが続々と建っているが、そのほとんどが集合住宅であり統計上でも都心の居住人口は増加している。にもかかわらず都心の休日の歩行者数減少が続いているということは、新たな都心居住者も休日には自家用車で郊外に出かけているためであると推察される。今後、新たに都心に転入してきた世帯を対象に、平日と休日の外出状況を調査すればこれが裏付けられると考えられる。

地点別歩行者の量を見ると、平日休日ともにJR浜松駅からフォルテ→遠鉄新浜松駅下→サゴー→鍛冶町→有楽街へと続く動線に集中している傾向は変わらず続いている。

個別の増減を見ると、旧来からの繁華街である都心西部で減少し、区画整理地区を含む東部で増加の傾向にある。旧都心では松菱百貨店やイトーヨーカドー等大型店の撤退が相次ぎ、その直近地点では大きな減少が見られる。一方、基盤整備後新たに建設が進む東部地区で歩行者が増加しており、都心の賑わいが西部から東部に移動してきていることが読み取れる。東部の歩行者量増加は、大きな予算を投入した区画整理の成果としては評価できるが、都心全体として見ると西部から人の流れを奪っていると見ることもできる。

2008年度調査で特徴的だったのは、地下横断道を地上の横断歩道に変更した鍛冶町の交差点付近で、目に見えて歩行者通行量が増えたことである。今日では歩行者にやさしい平面交差の方が好まれることが裏付けられたと言える。

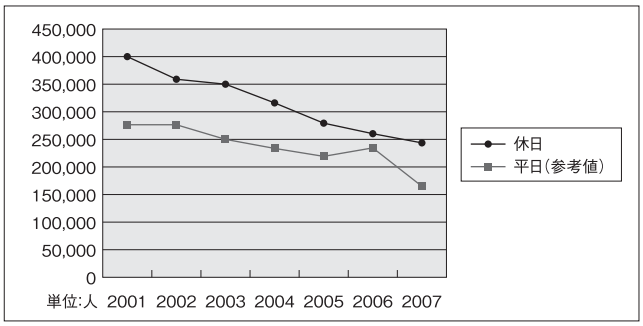

図1　都心歩行者交通量合計の推移（平成19年度の平日は降雨による参考値）

2008.11.1～11.9　アクトシティ浜松大ホール

第5回静岡国際オペラコンクール

OPERA SHIZUOKA INTERNATIONAL OPERA COMPETITION

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

第2次予選

「第5回静岡国際オペラコンクール」（主催:静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、本学他）は、11月1日（土）から9日（日）までアクトシティ浜松大ホールを会場に開催され、世界30カ国以上306名の応募者の中から、予備審査（6月2～5日、本学）を経て、この地に集まった若手オペラ歌手60名がその実力を競い合いました。

第1次予選からハイレベルな歌唱の連続で、予選通過は大変な激戦となりました。熱心なコンクールファンは毎日同じ座席に陣取り、第2次予選では公式鑑賞ガイドブック（平野昭教授解説）を片手に、各20分間に及ぶオペラの1シーンを堪能されていました。

そして、現田茂夫氏率いる東京フィルハーモニー交響楽団を迎えた本選には、韓国人5名、日本人1名が臨みました。ファイナリストに日本人が入ったこと自体が3大会振りの快挙でしたが、図らずも第1位をスイスに留学中の光岡暁恵さんが見事射止めました。日本人の第1位受賞は当コンクール史上初となります。

第1位の光岡暁恵さん

過去4回の入賞者の中には、メトロポリタン歌劇場、ミラノ·スカラ座、ウィーン国立歌劇場及び英国王立歌劇場など世界の一流劇場で活躍している者も少なくありません。光岡さんがこの受賞を機にこの先人たちの後に続くよう願ってやみません。

街中に掲げられたコンクールフラッグ

また、コンクールは準備段階を含め長期間に亘り、地元ボランティアを始め、多くの方々に支えられてきました。今回、初めてコンクール運営に携わった本学は、地域社会と協働することにより、静岡から世界へと広がる"しずおか文化"創造の一端を担えたのです。

2009.1.24／2009.2.7

[有馬朗人先生による特別公開講座]

「作句に親しむ」開催

文化·芸術研究センター

有馬朗人先生による特別公開講座「作句に親しむ」が1月24日と2月7日の2回にわたり、本学において開催されました。有馬先生は原子核理論物理学研究での輝かしい業績と東京大学総長、文部大臣などの公職を歴任される一方で、旧制中学3年から始められたという俳句の創作では東大の学生時代から山口青邨先生に師事され、現代日本を代表する俳人の一人でもあります。

俳句は現在でもわが国で広く親しまれている文芸であり、「五七五の定型に季語が入る」という原則がよく知られています。講義の中で有馬先生は、万葉集の頃に盛んに創作された長歌や近代における新体詩、文語定型詩、自由律短歌·俳句などの作品と対比しながら定型短歌·俳句のもつ「五七のリズムの良さ」や「ほどよい長さ」の重要性を説かれました。短く、かつ定まった型による作品は"飽き"が来ず、作品として永く命脈を保つ、柿本人麻呂や山部赤人の短歌が千年の歳月を超えて今なお人々に記憶されていることを例示され、また尾崎放哉や種田山頭火などの自由律俳句の魅力を論じながらも、自由律は成功·不成功のぶれが大きく、「天才的作家の成功はあり得る」が放哉や山頭火のような成功は容易なことではない、とも述べられています。そして「その度その度どんな型で詩を書くか悩むことは、むしろ不自由ですらある。俳句の定型が持つ不自由さは、自由」なのであり、新鮮さを保つために「自然を新しい目で見、新しい言葉、新しい生活に関心を持とう」と結ばれました。このほか俳句創作における文語·口語の問題、切れ字や修辞、掛詞など創作の基本にも触れられ、最後に受講生から提出された40余りの俳句を紹介しながら各作品について「写生が効いている」「理屈がありすぎ」「付きすぎ」「平凡」「説明しすぎ」などの様々な講評を加えられました。約90名の受講者は17文字の言葉の芸術の世界を堪能し、俳句を作ること、鑑賞することの楽しさを学んだことと思います。

※浜松市立城北図書館（浜松市中区）には有馬先生がご寄贈された約1000点の資料によって「有馬朗人コーナー」が設けられており、この中には有馬先生ご自身の句集や俳句論を始め、約360点の俳句関係の資料をみることができます。

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会　2008年度報告

小岩信治·平野昭（文化政策学部芸術文化学科）

2005年度から浜松·東京を中心に3年間にわたって実施し、シリーズとして昨年春にひとまず完結した「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」は、小倉貴久子氏らを迎えて歴史的ピアノと弦楽器によるアンサンブル作品を演奏するという主旨を継続しながら、今年度は名古屋と静岡で開催した。浜松市楽器博物館や第一生命ホールと密接な連携のもとに研究·教育のプロジェクトとして好評を博してきた「室内楽演奏会」であるが、今年度から新しい体制で文化·芸術研究センターの事業として発展的に展開すべく、その最初のステップとして2公演を実施した。

「ロマン派時代のミューズ」と題されたこの演奏会のテーマは、2009年に生誕200年を迎える作曲家フェーリクス·メンデルスゾーン·バルトルディであった。室内楽の歴史上重要な彼の《ピアノ三重奏曲第1番》など多彩なプログラムが、ヴァイオリンの桐山建志、チェロの花崎薫の両氏とともに最大ピアノ·トリオの編成で演奏された。

使用された歴史的ピアノは1845年にJ. B. シュトライヒャーが製作したもの（小倉氏所有）で、今回演奏された曲目がこのように19世紀中盤のピアノで演奏されることはきわめて珍しい。メンデルスゾーンの研究で知られる星野宏美氏がプレトークで指摘したように、こうした楽器を使うことによって、現代のピアノでは実現できない軽やかなテンポが可能になり、名作の古くて新しい姿を浮き彫りにした。岡田暁生氏は今回の演奏会の批評において、とくにチェロとピアノによる《ソナタ第1番》について次のように書いている。

金属フレームをほとんど使っていない木製の楽器［ピアノ］は、驚くほどチェロの響きと合う。そして共鳴の中から、思いもしない色彩が次々に生まれてくる。低音はティンパニ、フォルテの和弦はトランペット、高音のパッセージはフルート。第3楽章のアルペジオなど、本物のハープのようだ。（『朝日新聞』、2008年10月24日）

名古屋での公演は、中区の繁華街に2007年に開館したばかりの宗次ホールで10月20日に行われた。座席数310の小さなホールは本学室内楽演奏会の演目にほどよい規模であるが、歴史的楽器による演奏は開館以来今回の公演までほとんど行われていなかった。100名の熱心な聴衆を集めて行われた今回の公演によって、ホールのレパートリーとしても新しい可能性を示すことができたと言えよう。スタッフとして公演を支えた芸術文化学科と国際文化学科の学生は、オーナーである宗次徳二氏からホールの設立の理念などを直接伺うとともに、来場者に対するホールのスタッフのきめ細やかな対応を間近で学ぶことになり、今回の演奏会が充実したミニ·インターンシップの機会となった。

静岡公演は10月21日に、葵区のしずぎんホール　ユーフォニアに、およそ300名の来場者を迎えて盛況のうちに行われた。今回の催しでは、地元企業の方々にも多数ご来場頂き、音楽関係のメディアを通じての広報ではゆきとどかない層に、静岡市においてまだ数の少ない歴史的ピアノの演奏会を提供することができた。

本年度は、昨年までの演奏会の成果が二つの点で具体的に現れた年度でもあった。第一にCDの発売が相次いだ。2008年5月には第2回演奏会の演目を含むCD『ベートーヴェン　ピアノ協奏曲第4番「室内楽稿」　ワルター·ピアノによる』および『月光／春』（LMCD　1858，1859）が、9月には第3回演奏会の演目を含む『シューマン夫妻の室内楽』（LMCD　1868）が、それぞれ浜松市楽器博物館コレクションシリーズの第14～16集としてリリースされ、ベートーヴェンの2集が『音楽現代』誌推薦盤となるなど、いずれも高い評価を得ている。これによって2007年度までの3年度の演奏会シリーズは、2007年に発売された『ショパン　ピアノ協奏曲第1番　室内楽版　プレイエル·ピアノによる』（LMCD　1828）とあわせて、主要演目がすべてCD化されたことになる。

第二に、第1回演奏会の主要演目の再演が決定した。2009年秋に行われる浜松国際ピアノコンクールの期間中、11月20日の夕刻に、浜松市楽器博物館が所蔵するプレイエル製のピアノ（1830年）を使って、ショパン《ピアノ協奏曲第1番》などが、アクトシティ中ホールで再び小倉氏らによって演奏される。研究活動として始まった本学の事業の価値が、このように国際的な催しに組み込まれることで証されたことは、関係者として大きな喜びである。

「営利を目的としない手作りの音楽会のだいご味を、極めて完成度の高い演奏で存分に味わった」――――岡田氏は前述の批評をこう締めくくっている。演奏専門の学科を擁していないにもかかわらず、こうして質の高い演奏会事業を提供できることは、本学の強みであると言えよう。名古屋という新たな音楽市場に進出したことも足がかりとし、本学の特性を活かした事業をひきつづき展開してゆくため、学内外のみなさまのご理解·ご協力をお願いする次第である。

編集後記

「産業都市」「ものづくりの街」である浜松にデザイン学部が開設されて、まもなく10年目を迎えようとしています。本号ではデザイン学部長の河原林教授に現代におけるデザインへの期待や浜松の産業、文化芸術の発展に向けてデザインが果たすべき役割と可能性などについてご寄稿頂きました。産業都市として発展する前、かつて東海道屈指の宿場町であった浜松は古くから多文化の行き交う街でもあったはずです。浜松の多彩な側面に光を当て学術的貢献の役割を担う本学研究活動の一端をお伝えすることが本誌の役割と考えています。

Art & Culture
文化と芸術
文化·芸術研究センター
ニュースレター
Vol.9
March 2009

発行人:上野征洋　　編集人:冨田晋司
発　行静岡文化芸術大学 文化·芸術研究センター
（事務局　静岡文化芸術大学 企画室）

PRINTED WITH SOY INK
古紙配合再生紙及び大豆インクを使用しています。